

本庄比佐子・内山雅生・久保 亨編

『華北の発見』

汲古書院 二〇一四・四刊

A5 三七〇頁 六〇〇〇円

東洋文庫近代中国研究班は、近現代において日本人が「華北」をいかなる地域として認識したのかを課題として長年共同研究を進めてきており、二〇一二年二月の公開シンポジウムにおける議論を経て刊行したのが本書である。本書は「はじめに」と十四章から構成されている。

本庄比佐子「はじめに」は、本書を編集するに至った経緯や問題意識、各章の概要を示す。

久保亨「華北地域概念の形成と日本」は、日本近代の対中関係史における「華北」地域の捉え方の形成過程を日本の出版物から分析し、地域概念形成における経済的・軍事的要素の役割を明らかにする。

吉澤誠一郎「『西北』概念の変遷」は、「華北」の地域概念の歴史的特徴を考察するために分析対象を「西北」に設定し、明代から現代に至るまでの「西北」の語義の変遷を考察する。

浅田進史「ドイツ・中国関係史からみた華北」は、十九世紀後半から二十世紀初頭のドイツ・中国関係史における文脈に即して、ドイツ語圏における「華北」認識の変遷を検討する。

富澤芳亜「新聞記事から見る華北認識」は、新聞記事を素材に

一九二〇年代までの日本における華北認識の特徴や変遷を明らかにする。

松重充浩「朝鮮在住日本人の華北認識」は、植民地朝鮮に居住する「外地」日本人に焦点をあてて華北認識の変遷を説明する。

田中比呂志「戦時期華北在住日本人の華北認識」は、山西省を中心に華北に暮らした日本人の華北認識を検討し、その実態と独自性を明らかにする。

瀧下彩子「旅先としての華北」は、戦前・戦中期における日本人の中国旅行に着目し、華北も旅先として含まれるようになったことや、温泉が果たした役割を指摘する。

内山雅生「戦時期日本の中国農村研究と華北」は、戦時中日本の中国農村研究を牽引した人々及び先行研究から日本人の「華北」認識の一端について検証する。

佐藤仁史「民間信仰からみる江南農村と華北農村」は、祠・廟を手がかりに近代江南農村との比較を通して、とりわけ福武直をはじめとする日本人研究者の華北農村に対する認識を検討する。

弁納才一「農業生産からみた華北農村経済の特質」は、農作物の生産状況から「華北」度を措定し、農村経済の側面から「華北」の再認識を試みる。

張思「村の文書からみた現代華北農村」は、氏が近年蒐集した農村檔案を中心に華北農村の現代史を農民自身の語りから見直す可能性を提示する。

リンダ・グローブ「二十一世紀の『華北農村慣行調査』村」は、一九九〇年代以降に実施された華北農村慣行調査の四村落の再調

査から村落の変貌について考察する。

江沛「華北の交通システム近代化と都市の変動」は、近代交通システムの形成に伴う都市の勃興をテーマに近代華北の変動を考察し、日中戦争以前の華北における都市空間構造の変容を指摘する。

張利民「中国の近代華北地域史研究の現状と展望」は、一九八〇年代以降における中国の近代華北地域史研究を紹介し、その課題と展望を指摘する。

本書は、様々な視点から「華北」概念を捉えんとするものであるが、「華北」と関係深い「西北」、江南、ドイツ、満洲や朝鮮などの地域と比較していることが特徴的である。史料についても新聞や雑誌、旅行案内、回想録、檔案など多岐にわたる。また、農村や都市、農業生産、旅行など多様な問題意識から検討されていることも大きな特徴であり、関連研究分野の研究者にとって示唆に富む論文集である。

(菅野智博)